

2020. 1. 17 (日) マラキ3 : 7~18

3:7 あなたがたの先祖の時代から、あなたがたはわたしの掟を離れ、それを守らなかった。わたしに帰れ。そうすれば、わたしもあなたがたに帰る。——万軍の主は言われる——しかし、あなたがたは言う。『どのようにして、私たちは帰ろうか』と。

3:8 人は、神のものを盗むことができるだろうか。だが、あなたがたはわたしのものを盗んでいる。しかも、あなたがたは言う。『どのようにして、私たちはあなたのものを盗んだでしょうか』と。十分の一と奉納物においてだ。

3:9 あなたがたは、甚だしくのろわれている。あなたがたは、わたしのものを盗んでいる。この民のすべてが盗んでいる。

3:10 十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしを試してみよ。——万軍の主は言われる——わたしがあなたがたのために天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうか。

3:11 わたしはあなたがたのために、食い荒らすものを叱って、あなたがたの大地の実りを滅ぼさないようにし、畑のぶどうの木が不作とにならないようにする。——万軍の主は言われる——

3:12 すべての国々は、あなたがたを幸せ者と言うようになる。あなたがたが喜びの地となるからだ。——万軍の主は言われる。

3:13 あなたがたのことばは、わたしに対して度を越している。——主は言われる——あなたがたは言う。『私たちが何と言ったというのですか』と。

3:14 あなたがたは言う。『神に仕えるのは無駄だ。神の戒めを守っても、万軍の主の前で悲しんで歩いても、何の得になろう。

3:15 今、私たちは高ぶる者を幸せ者と言おう。悪を行っても栄え、神を試みても罰を免れる』と。』

3:16 そのとき、主を恐れる者たちが互いに語り合った。主は耳を傾けて、これを聞かれた。主を恐れ、主の御名を尊ぶ者たちのために、主の前で記憶の書が記された。

3:17 「彼らは、わたしのものとなる。——万軍の主は言われる——わたしが事を行う日に、わたしの宝となる。人が自分に仕える子をあわれむように、わたしは彼らをあわれむ。

3:18 あなたがたは再び、正しい人と悪しき者、神に仕える者と仕えない者の違いを見るようになる。」

#### <説教>

天の父なる神はご自分の民、〈ヤコブの子ら〉を変わることなく愛しておられました。

それゆえ彼らが〈絶え果てる〉ようにはなさらないと言われました。(6)

マラキを通して宣告される厳しいことばも、神が彼らをどこまでもご自分の子としてお取り扱いなさっているからでした。

〈父がいとしい子を叱るように、主は愛する者を叱る。〉(箴言 3:12) のです。

それで、彼らに悔い改めを命じ、ご自分のもとにお招きになります。

3:7 あなたがたの先祖の時代から、あなたがたはわたしの掟を離れ、それを守らなかった。

わたしに帰れ。そうすれば、わたしもあなたがたに帰る。——万軍の主は言われる——しかし、あなたがたは言う。『どのようにして、私たちは帰ろうか』と。

〈わたしに帰れ〉とは「神に立ち返れ」、つまり「悔い改めよ」ということです。

それに対して民は「どのようにして、私たちは帰ろうか」とまた反問しました。

これも彼らが既に「どのようにして、…」(1:2,6、2:17)と同じように、真面目に悔い改めよう、悔い改めのありかたをへりくだって神に尋ねようという言葉ではありませんでした。

「私たちは悔い改めています。なおも私たちが悔い改めるべき罪とは何ですか？」というような神への文句、反発という感じです。

神はここでもはっきりと、厳しいことばでお答えになりました。

3:8 人は、神のものを盗むことができるだろうか。だが、あなたがたはわたしのものを盗んでいる。しかも、あなたがたは言う。『どのようにして、私たちはあなたのものを盗んだでしょうか』と。十分の一と奉納物においてだ。

3:9 あなたがたは、甚だしくのろわれている。あなたがたは、わたしのものを盗んでいる。この民のすべてが盗んでいる。

「あなたがたは盗みの罪を悔い改めて、〈十分の一〉をきちんと献げなさい」と神は言われました。

〈甚だしくのろわれている〉の直訳は「のろいの中でのろわれている」「のろいにのろわれている」です。

既に神が指摘されていたように、イスラエルの民は、いい加減なささげ物(汚れたパン、損傷のある動物など)を献げることによって、また異教徒との雑婚によって、また安易な離婚によって、神の祝福を失い、のろいを受けていました。

それに加えて、十分の一を献げていないことによって神のものを盗んでおり、一層ますます神からのろわれていたのです。

〈十分の一のささげ物〉は確かに神の律法として定められています。

〈地の十分の一は、地の産物であれ木の実であれ、すべて主のものである。それは主の聖なるものである。〉(レビ 27:30)等。

しかし、既に学んだように、更に歴史を遡れば、イスラエルの民の父祖アブラハムが、またヤコブ(つまりイスラエル)が、恵み深くあわれみ深い神に感謝するが故に、神から命じられてではなく、自分から喜んで神にお献げしたのが〈十分の一のささげ物〉でした。

それを神がよしと認めてくださり、受け入れてくださったのです。

そして、やがてアブラハムやヤコブの子孫であるイスラエルの民が出エジプトという神の大きな恵みを受けた後に、人々が神に感謝と喜びをもって献げるささげ物として〈十分の一のささげ物〉が定められました。

そもそも持っている物のすべて、いや自分自身の命もからだも含めてすべて、十分の十が神から与えられたものであり、神の恵みの賜物です。

命もからだも罪と悪魔の支配から滅びから神が救ってくださり、続けてからだも命に必

要なすべてを神が与えてくださり、ご自分の子として養い育ててくださっています。

そんな神を知り、神の限りない恵みを覚えて神に感謝する人は、もやは律法の決まりだから仕方なく、渋々いやいやながらというのではなく、むしろ神が律法にはっきりとお示しになってくださったのであればこそ、神のみこころに従って喜んで神にお献げするのが本当の〈十分の一〉のささげ物（献金）なのです。

ですから、私たちは神と神の恵みを知らなければどんなに頑張っても、〈十分の一〉すら喜びと感謝をもって献げることはできないのだとも言えます。

神と神の恵みを心から本当に知って喜び感謝する人が、献げられることをこれまた神と神の恵みによって特別に許されたささげ物（献金）、それが〈十分の一〉なのです。

そういう意味では神の子、神の民が神にお献げする物の、初めの一步、「基本のき」です。

そして神への益々の、日々の感謝は〈十分の一〉では飽き足らず、〈と奉納物〉とあるようにもはや〈十分の一〉以上を喜んで献げますのです。

しかし、とは言え、私たち人間はすぐに神の恵みを忘れてしまう罪人です。

すべて、十分の十が神から与えられたものだということを忘れ、自分で手に入れたものだといなる勘違いをします。

〈十分の一〉さえそれが莫大なものに思え、献げることが惜しくなり、「十分の一はすべて主のもの」などと言う神を（そしてそんなことをまともに教える人を）まるで悪魔のように思うようです。

反対の意味で「多くの者を教えによってつまづかせ」た(2:8)と文句を言うのです。

そのように、神よりも金や物を愛し、そちらに引かれ、そちらに支配される罪にいつも傾いているのが私たち罪人です。

「地の十分の一は、地の産物であれ木の実であれ、いわば無条件で、最初からすべて主のものである。それは主の聖なるものである。」

そう神から言われて、いつも目を覚まさせられている必要のある者、自分が本来神よりも金を愛する者であることを思い知らされ、いつも神に目を向け神に立ち返る必要がある者なのです。

イスラエルの民も同じでした。

「神に仕えるのは無駄だ。神の戒めを守っても、万軍の主の前で悲しんで歩いても、何の得になろう。今、私たちは高ぶる者を幸せ者と言おう。悪を行っても栄え、神を試みても罰を免れる」(14,15)とイスラエルの民は言っているとすぐ後で神は言われます。

〈十分の一と奉納物〉(8)についても彼らはそのように思い、言っていたのでしよう。

「十分の一を献げても無駄だ、何の得になろう。十分の一を献げなくても栄え、罰を免れる」などと。

それで、そんなことを言って神を愛さず恐れず、反対に侮り軽んじている限りわたしはあなたがたを祝福しない、できない、むしろ甚だしくのろって、懲らしめるほかないと神は言われたのです。

しかし神はご自分の民を甚だしくのろいたいのではなく〈あふれるばかりの祝福〉を彼らに注ぎたいのです。

ご自分のもとへの立ち返り（悔い改めて）をどこまでもお求めになるのです。

ですから言われました。

3:10 十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしを試してみよ。——万軍の主は言われる——わたしがあなたがたのために天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうか。

3:11 わたしはあなたがたのために、食い荒らすものを叱って、あなたがたの大地の実りを減ぼさないようにし、畑のぶどうの木が不作とならないようにする。——万軍の主は言われる——

3:12 すべての国々は、あなたがたを幸せ者と言うようになる。あなたがたが喜びの地となるからだ。——万軍の主は言われる。

〈わたしの家の食物〉と言われますが、神が食べ物を必要としていることではなく、これは実際には神殿で働く祭司やレビ人の〈食物〉となるのでした。(民数記 18:21-24)

更には〈寄留者、孤児、やもめ〉といった人々にも与えられるのでした。(申命記 26:12,13)。

ほぼ同時代に書かれたネヘミヤ記には〈レビ人の分が支給されていなかったために、務めに当たるレビ人と歌い手たちが、それぞれ自分の農地に逃げ去っていた〉と記されています(ネヘミヤ 13:10)。

それはイスラエルの民が〈十分の一〉のささげ物を怠っていたからでした。

すぐ前にはイスラエルの民が〈やもめやみなしごを苦しめ〉〈寄留者を押しつけてわたしを恐れない〉と神は叱責なさいました(マラキ 3:5)が、それも〈十分の一〉のささげ物がないがしろにされていたことにも原因があったのでしょう。

民が神のものを盗んで〈十分の一〉を献げないでいたことで彼らは神を恐れず愛さず、人も愛さないでもいたのです。

そんなことでは神の民として神の栄光を現ことはとてもできたものではありません。

神の祝福を受ける幸いに与ることはできません。

それで神はご自分の民に〈十分の一〉を強くお命じになるのです。

マラキ書のこの箇所は、人が神を〈試す(文字通りテストする)〉ことを神がお許しになっている、いやお命じになっているただ一つのケースと言えるでしょう。

人は〈あなたがたの神である主を試みてはならない〉(申命記 6:16)これが大原則です。

でもここで例外を設けてまでも、ご自分の民のために〈天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐ〉、〈食い荒らすものを叱って、あなたがたの大地の実りを減ぼさないようにし、畑のぶどうの木が不作とならないようにする〉、これが神の御意思(みこころ)です。

そして〈あなたがたを喜びの地〉とし、〈すべての国々は、あなたがたを幸せ者と言うようになる〉、これがご自分の民に対する神の御意思です。

今は「甚だしくのろわれている」とまで言われていますが、神に喜ばれる者、神の〈もの〉、神の〈宝〉となる、「わたしは彼らをあわれむ」(3:17)と言われるのです。

そういう神のあわれみを受ける者、〈主を恐れる者たち〉(3:16)、神に感謝して喜んで

〈十分の一〉を（そして更にそれ以上まで）献げ、神を愛し人を愛する民を神が〈再び〉(3:18)お造りになるのです。

14,15 節にあるような私たちの不信仰と私たちを戦わせ、克服させ、私たちの目を覚まさせて〈正しい人と悪しき者、神に仕える者と仕えない者の違いを見るように〉(18)させてくださいます。

私たちが主なる神を知り、神の義と愛を知り、神を〈恐れ、主の御名を尊ぶ者〉とし、〈主の前で記憶の書〉に記される(16)ようにしてくださいます。

そのためにイエス・キリストはこの世に来られました。

私たちの罪のために、まずキリストが罪無きご自身を、その地上の生涯を最後の十字架の死にまで神にお献げになりました。

このキリストによって神を知り、神の義と愛を、めぐみとあわれみを知り、信じた私たちが、日々神に立ち返り（悔い改め）、ただ感謝と喜びをもってまず〈十分の一〉を神に献げ、ついには自分自身を献げて、神と人を愛し、神の栄光を現して生きるのです。